

デイビット・シムのソフトシティ論における建築および都市空間の特徴

建築計画研究室 狩野 尊弘
(令和5年2月20日提出)

1. 研究の背景と目的

わが国における社会問題の少子高齢化、人口減少、大都市圏への人口流出、インフラの老朽化、環境問題は、持続可能で強靱な都市を考える上で解消すべき問題である。こうした状況を踏まえて、低炭素で、持続可能で、高齢者にも優しい都市を目指すべきである。

そこで提案されるのがコンパクトシティである。近年のコンパクトシティに関する都市論に関する言説として、ソフトシティ(以下 SC という)とニューアーバニズム(以下 NU という)がある。

本研究では、人間重視の都市を目指す目的でデイビット・シムによって2019年に提唱されたSCと、車に依存したアメリカの都市を改善するためにピーター・カルソープを含む6人の建築家により提唱されたNUの比較を通じて、SCの建築および都市空間について特徴を明らかにする。

2. デイビット・シムの「ソフトシティ」の概要

モダニズムは、住まい、職場、余暇、交通などといった各種の都市機能を分離すべきであるという機能主義の考え方である。これを批判し、人間重視の街を目指す考えがSCの基となっている。

デイビット・シムが定義するソフトな街とは、人々が近づき、互いに結びつき、身のまわりのあらゆる物事とつながりをもつことに関わっている。デイビット・シムは、『急激な都市化を解決するのは、複雑な最新技術ではなく、簡単で、小規模で、ローテクで、安価な、人間重視の穏やかな解決策である。』と言及している。

3. ソフトシティの9原則

デイビット・シムは、SCで『高密な都市形態を測定するには、定性的基準が必要である。』と言及している。ここでの高密とは、単なる人口や建物の高層化だけでなく、用途が混在し、それが都市全体に及ぶことを指す。それは、構築形態が日常生活をどのように支えているか、その都市形態がそこで暮らす人びとの生活の質を高めているか、絶えず変化する社会・環境・経済に対して強靱性と適応性を備えているかの実現度合いを測定できるものである。

本論文では、住みよい都市的密度をつくり出すための定性的基準を「SCの9原則」と呼ぶ。この9原則は、SCの終章「Nine Criteria」に記載されている。これらは、「1. 建築形態の多様性」、「2. 屋外空間の多様性」、「3. 柔軟性」、「4. ヒューマンスケール」、「5. 歩きやすさ」、「6. 制御感と一体感」、「7. 快適な微気候」、「8. カーボンフットプリントの低減」、「9. より大きな生物多様性」の通りである。

4. 分析の方法

デイビット・シムは、本書の中で建築から都市への空間の広がりについて、『SCでは、悠々自適に身のまわりの世界と交流するように促され、住まいや職場から一歩外に出て、近隣地区、都市全体という風に広がっていくのである。』と言及している。

したがって、都市を構成する空間の要素を「建築」、「中間領域」、「公共空間」、「都市」に分かりやすく整理した。この都市の空間構成モデルを図1に示す。

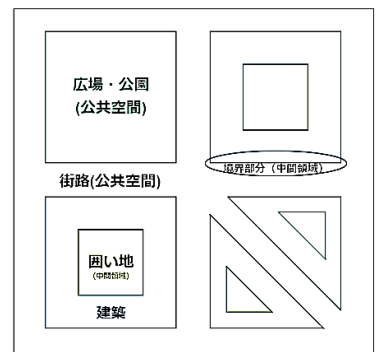


図1 都市の空間構成

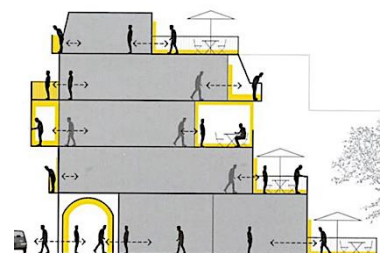


図2 境界部分の例(黄色)

「建築」は、各敷地に建つ建物以外に、街区の通りに面して並ぶ建築群も包括して考える。

「中間領域」とは、街路や公園・広場といった公共空間と建築物の中の私的空間のどちらにも分類することができない、デイビッド・シムの言うところの『半公的』、『半私的』という中間的空間である。これには、囲み型街区において私的な屋外空間となる囲い地と、ポーチやベランダのような外と内の緩衝地帯となる境界部分が含まれる。境界部分の例を図2に示す。

「公共空間」とは、広場・公園、街路の公的な屋外空間のことを指す。

「都市」とは、これら「建築」、「中間領域」、「公共空間」を含んだ全体の空間のことを指す。

本研究では、SCにおける住みよい都市的密度をつくり出すための9原則を基準に、SCとNUのそれぞれの書籍の章題等を基に整理したキーワードを、都市を構成する空間の要素に当てはめて比較する。NUが提唱された1990年代からSCが提唱された2019年の約30年の経過における「目指すべき都市の理想像」という点での類似点・相違点をもとにSCの建築・都市空間の特徴を明らかにする。

5. まとめ

SCの建築および都市空間について、空間を構成する要素の整理を行い、NUとの比較を通じて、以下のような特徴を持つことが明らかになった。

「建築」

SCを構成する建築物は、4、5階建てのそれぞれが独立し、接続し、重層化した建物で構成される。また、それらがつくり出す囲み型街区は、①用途、建築様式など多様な建築形態、②比較的容易に階段を上ることができる高さ、③街路との良好なつながりの維持が可能、④自然換気や採光などによる快適な微気候の提供、⑤隣り合うファサードの変化による魅力があるといった特徴を持つことが明らかになった。

「中間領域」

建物に囲まれて生まれる囲い地は、①物理的・視覚的な保護によるプライバシーと安全の提供、②中庭としての活用、③快適な微気候の提供、④生物の生息地の提供といった特徴を持つことが明らかになった。

また、ポーチやバルコニーなどの境界部分は、①接地階における1階の拡大先と交流の空間、②上階におけるプライバシーを守る緩衝領域となることが明らかになった。

「公共空間」

街路は、コンパクトでヒューマンスケールである特徴を持っていた。さらに、①対面通行道路であること、②中央分離帯を設置すること、③歩道を連続させ脇道によって寸断させないこと、④交差点の縁石を車道側に拡張し空間をつくること、⑤歩道を公共交通のプラットフォームと共有できること、⑥歩道をオープンテラス利用できるといった条件を持っていた。

河川などの自然環境資源は、人間の知覚体験に訴えかけ、安らぎを与えるものであるため、オープンスペースとして保全されていることが明らかになった。

「都市」

都市において、囲み型街区は、①高層建築と同じ密度で、1階と最上階の割合を増やし、ヒューマンスケールで低層高密を実現できる、②高層建築に比べて、基礎と工法が単純、建設費と維持費を抑える、③公的屋外空間と私的屋外空間の異なる2種類の有用な屋外空間を近接して共存させる、④街路と建物の境界を街区のエッジで画定することにより、街区同士をコンパクトに配置することが可能である、⑤歩行者の容易に出入りできるといった特徴を持つことが明らかとなった。さらに都市空間全体を通じて、⑥通りの活性化できる、⑦アクティブモビリティの促進、⑧緑を増やすことで空気を浄化し、ヒートアイランド現象の抑制や緩やかにろ過する排水システムとして活用できることも明らかになった。

このように、SCの持つ建築・都市空間の特徴は、絶えず変化する社会において、屋内外の多目的空間や経年的な開発が可能である囲み型街区を形成できるため、持続可能で強靱な都市づくりを可能としている。